

新用法からみた対話型接続詞「だって」の性格

沖 裕 子

キーワード：対話型接続詞 「だって」 語義 文連接 談話 気づかれにくい方言

1. はじめに

現在の大学生世代で「だって」の用法に変容が認められる。本論では、従来の用法と新用法の差異を記述し、対話型接続詞「だって」を説明するための記述の枠組みについて再検討を行なってみたい。

本論でとりあげるのは、沖(1996)では扱わなかった用例の広がりである。その論述に立脚しながら、発展させていきたい。

2. 本論の立場

沖(1996)では、「だって」を「なぜなら」「でも」と対比させながら考察した。そこで主張したのは次の点である。本論の記述の発展を示すためにも、はじめにまずふりかえっておきたい。「だって」に関係する部分のみ整理して示す。(注1)

- (1) ①「だって」の基本的意味は〈理由説明〉にあり、逆接の意味は持たない。
- ②「だって」が相手の発話を受ける受話の冒頭に位置する場合、モーダルな意味として〈相手の意図に反する主張〉が生じる。そのようなものは、逆接には含めない。
- ③逆接とは事柄の命題間の関係のレベルで処理できるものに限定して考える。
- ④「だって」の命題推論の意味は〈理由説明〉ひとつで一元的に説明できる。受話の冒頭に位置する「だって」には「省略の機構」が働いており、文(事柄)を復元することによって知られる。
- ⑤省略の仕方にはバラエティがある。

3. 「だって」の新用法

さて、次にみる(2)(3)は、現在の大学生世代にみられる新用法の一例である。

(2) a 「ごめん。遅れちゃった。」

b 「だって、今日学校あったもんね。」

(3) a 「あ、やってくるの忘れちゃった。」

b 「だって、aちゃん忙しかったでしょう。」(注2)

この用法の地理的分布や変異の様相についてはいずれ手順を踏んだ調査を行わなければならないが、今一部の地域であったとしても「だって」が用法変化を起こしているというその

事実を本論ではとりあげることにしよう。この事実をまずは指摘し、現在起こりつつある変化の現象を説明することによって、「だって」の持つ性格を記述するために必要な理論的枠組みについて再検討を加えてみたい。なお(2)~(4)は、1995年現在信州大学人文学部に在籍し論者の日本語学演習を履修している学生によって得た。出身は、長野県、愛知県、山口県など。(2)(3)はいずれも親しい間柄で使用される。

さてそれでは、これらは従来の用法とどこが異なるのであろうか。

まず、従来の用法、典型的な「だって」の用法はいかなるものか簡単に示そう。対話型の「だって」について以下(4)(5)を例としてあげる。

(4) a 「試験だから勉強しなさい。」

b 「だって、疲れちゃったんだもの。」

(5) a 「一緒に行こうよ。」

b 「だって、忙しいんだもん。」

先にみた沖(1996)の考え方によると、こうした会話の受話の冒頭に出現する用法では省略の機構が働いていることになる。それを復元して示すと以下(4')から(5')が得られる。括弧内は復元箇所。以下、同様の示し方をする。

(4') a 「試験前だから勉強しなさい。〔X〕」

b 「(勉強しない。〔P〕) だって、疲れちゃったんだもの。〔Q〕」

(5') a 「一緒に行こうよ。〔X〕」

b 「(行かないよ。〔P〕) だって、忙しいんだもん。〔Q〕」

ここにみるように、「だって」は命題推論的には省略された〔P〕と、〔Q〕とを〈理由説明〉で結び、モダリティ的には〔X〕の意図に対する反として〔P〕を布置させる働きを持っている。

それではこれと同様に、新用法(2)(3)の省略された部分を先と同様に補って示してみよう。

(2') a 「ごめん。遅れちゃった。〔X〕」

b 「(いいよ。〔P〕) だって、今日学校あったもんね。〔Q〕」

(3') a 「あつ、やってくるの忘れちゃった。〔X〕」

b 「(いいよ。〔P〕) だって、aちゃん忙しかったでしょう。〔Q〕」

従来の用法と、新用法とはどこが異なるのであろうか。

両者のみかけ上の大きな違いはふたつある。第1点は〔P〕と〔X〕との関係であろう。従来の用法では「だって」は〔X〕と〔P〕を結び、その〔P〕は〈相手の意図に反する主張〉をなしていた。「勉強しなさい」という《命令》に対しては、「勉強しない」という《拒否》を述べ、「一緒にいこうよ」という《勧誘》に対しては、「行かない(あるいは行けない)」という《断り》を述べるものであった。ところが新用法では、〔P〕はそれぞれ「いいよ」であって、一見相手に対する共感とでもいうものを表しているように感じさせる。「いいよ」は「しょうがないよ。いいよ。」というほどのニュアンスである。(注3)

第2点として、〔P〕と〔Q〕との関係があげられる。従来の用法の〔Q〕では、「疲れちゃった／忙しい」などは「話し手bの側の理由」を述べるものであった。それに対して新用法の〔Q〕で述べられる「学校あったもんね／aちゃん忙しかったでしょう」は「相手の側aの事情を考慮・推測した理由述べ」になっている。

4. 記述に必要な枠組みについて

4. 1 変化したもの, 変化しないもの

このような用法上の変化を説明するためには, 沖(1996)で述べた語義記述を踏まえながら, 更に記述の枠組みを再検討する必要があるようである。

新しい変化は, [親密な関係にある] 人との会話で起きていることはすでに述べた。[親密な関係にある] 人とは, つまり情報を共有できる人である。そこに, [相手の身になって考える] というルールが加わった時, 先に見た2点の特徴によって, 新用法ではいわば「共感談話」「気配り談話」とでもいうべき用法が成立しているとみることができる。

ここで変化していないのは, 「だって」の持つ〈理由説明〉という命題推論の論理表現に関する語義の部分である。この〈理由説明〉という語義を, 変化しない扇の要とし, 談話レベルの意味の変異を扇面のひろがりとして, あたかも扇を開いたように意味の拡大を見たのが, この変化の現象の見取り図であろう。変化しているのは, 談話生成の際の社会言語学的なルールの部分である。

それでは, 語義のレベルと談話のレベルをどのように位置づけ, 従来の用法および新用法を含む説明を行なったらよいのであろうか。

4. 2 語義のレベル・文接続のレベル・状況のレベル

従来の用法と新用法とを以下に一例ずつ再掲しよう。以下, 従来の用法を, 旧用法と呼ぶことがある。旧用法とはいうものの古び捨て去られた用法のことではなく, 後述するように“旧用法”の方がむしろ現在も「だって」の使い方の中核をなすものである。

旧用法:

(4') a 「試験前だから勉強しなさい。[X]」

b 「(勉強しない。[P]) だって, 疲れちゃったんだもの。[Q]」

新用法:

(2') a 「ごめん。遅れちゃった。[X]」

b 「(いいよ。[P]) だって, 今日学校あったもんね。[Q]」

さてこれら『a-b』という文接続(談話)の直前にはもうひとつの「文」が想定できると考える。それはあるいは非言語的な[発話状況N]と考えてもよいであろう。たとえば, 次の如くである。

(4'') [状況N: a; bに勉強させたい

b; 勉強するのがいやだ]

a 「試験前だから勉強しなさい。[X]」

b 「(勉強しない。[P]) だって, 疲れちゃったんだもの。[Q]」

(4')では, すでに出話者aと受話者bとの間に[対立的]な状況があって, その対立的状況を背景にして『a-b』の談話が生成されている。

またこの場合, aの出話は《命令》である。命令に対しては従うか従わないかが求められるが, 会話の場合非言語的な情報で対処が可能である。従うか従わないかについては言語化

しなくても分かる。言い換えれば、だから〔P〕を省略することもできるのである。《命令》という出話の特性およびa b双方の状況認識という前提からいって返答〔P〕が要求され、しかも〔P〕は反発的な内容となることが推察可能なので省略されうる。

それに対して、(2)はいかがであろうか。

(2'')〔状況N：a；aは謝りたい。

b；aを受け入れたい。〕

a「ごめん。遅れちゃった。〔X〕」

b「(しょうがないよ。いいよ。〔P〕) だって、今日学校あったもんね。〔Q〕」

この例では、aとbは〔親和的〕である。《謝罪》に対しては、受け入れか拒否かが受話として示されなければならないが、会話の場合非言語的な情報で十分伝えあうことができる。この〔親和的〕な状況の中で、〔P〕が〔受け入れ〕であることが十分示され、従ってこの場合も〔P〕の部分の受話は省略に従うことができるのである。ここでは、省略に従う〔P〕は、「しょうがないよ。いいよ。」という同調的・共感的な表現になる。

新用法においても旧用法においても、「だって」が担う〈理由説明〉という命題推論的な語義の部分は変化していないことは先に述べた。今ここでみると、

(6)〔状況：N〕

a「〔X〕」

b「(〔P〕) だって 〔Q〕」

という文接続の形式的な連鎖そのものも変化していないことが分かる。「だって」は命題推論的には〔P〕と〔Q〕を結び、会話中では、〔P〕は〔X〕に対する返答を行なっているという骨格は変化していないのである。

また、さらに言えば、受話の冒頭を「だって」で始めることができるという現象は会話体で実現されている。会話であるからこそ、出話者と受話者は(原則的には)場面を共有し、両者を含んだ場面的状況が前提される。そうした、〔発話状況N〕というものが前提されるという枠組みも旧用法と新用法とでは変化がないといえる。

結局、新旧二用法において変化をしたのは、代入される〔N〕と〔X〕〔P〕〔Q〕の値とすることに単純化できる。

沖(1996a)が行なったような文接続の形式化及び文法的語義の記述は大変重要である。しかし、それだけでは不足で、談話の発話状況の記述レベルも必要であるということが、ここまでのところで明らかになったことと思う。(注4)

沖(1996)のコメントとして井上優氏より1996年8月22日付で電子メールにてコメントを賜った。そこで述べられたのは、本論とほぼ同様の考え方であった。引用したい。

〈前提〉

子供は勉強していない。(P)

〈Pに対するコメント1〉(異議申し立て)

「試験前だから勉強しなさい。」(母)

〈Pに対するコメント2〉(正当化)

「だって、疲れちゃったんだもの。」(子)

ある状況Pをめぐる話し手と聞き手の攻防において、Pの正当化（Pに対する弁明）をおこなう場合にその冒頭で「だって」が用いられる。

井上（1996）に学ぶべき点は、「正当化」という意味記述にある。沖（1996）では、「だって」のモーダルな意味の記述をaとb, [X]と[P]との文接続からのみ考察して〈相手の意図に反対する主張〉としたが、そうした記述では新用法との連続性を考える際に無理が生じる。しかし井上（1996）のように考えれば、[状況N]と「だって [Q]」とのからみで出て来る「正当化」が「だって」の持つモーダルな意味として記述できる。また、ここでは立ち入らないが、独話型の「だって」にも共通して感じられるモーダルな意味についても統一的に説明が可能になる。

そして、これによってこの新用法の場合にも〈正当化〉というモーダルな意味は変化して、代入される値の変化だけを考えればよいことになる。旧用法は値がb本人の立場に立った[P]の正当化、新用法の場合は、値が相手aの立場にたった[P]の正当化になるわけである。

つまりは、沖（1996a）の意味記述を修正することによって、「だって」の語義部分の枠組は〈理由説明〉という命題推論、〈正当化〉というモダリティ両者にわたって、変化を被っていないと単純化できる。

眼前の具体的な状況とは関係なく《勧誘》や《依頼》が発話されることもあることを考えれば、「〈前提〉」を把握して「〈Pに対するコメント1〉」が発話されるわけでもない。従って井上の「〈Pに対するコメント1〉」（本論の[X]）は、「〈前提〉」の内実からは自由なものとして捉えておきたい。「〈コメント2〉」（本論の[P]）が、[X]と[状況N]を把握して選択されると考えている。なお、本論の考え方では[P]を復元するので、[状況N]には、aとbの関係のみ記述すればよい。

5. 新用法と旧用法

5. 1 旧用法と新用法について

旧用法と新用法の差異について対照させつつ、もう少し描写しておきたい。

旧用法

(7) [状況N：aとbは対立的]

a 「明日、スキーに行ってくれない？ [X]」

b 「(いやだ。[P]) だって、忙しいもの。[Q]」

新用法

(8) [状況N：aとbは親和的]

a 「明日、スキーに行ってくれない？ [X]」

b 「(いいよ。[P]) だって、お休みだもんね。[Q]」

(7)(8)においては、ともに[P]を省略しうる。

ところが、以下の例では、旧用法では省略可能、新用法では省略されると違和感を覚える個人がいる。

旧用法

(9)〔状況N：aとbは対立的〕

a「明日、スキーに行かない？〔X〕」

b「(いやだ。〔P〕) だって、忙しいもの。〔X〕」

新用法

(10)〔状況N：aとbは親和的〕

a「明日、スキーに行かない？〔X〕」

? b「(いいよ。〔P〕) だって、お休みだもんね。〔Q〕」

aとbとが親和的な状況にあるという共通理解がある場合、(8)のように「スキーに行ってくれない？」と《依頼》されたいいてい受けてもらえるという感触がある。即ち受話には返答が来て、かつそれは受諾であるという「当たり」がつくので、〔P〕の「いいよ」という受話は省略されてもa、b相方文意が了解できる。しかし(10)のように「明日スキーに行かない？」という誘われ方だと、行くか行かないかが分からないから質問をしてきていると考えられ、諾否についての返答〔P〕がないと違和感があるというインフォーマントの説明である。

ところが、次のような旧用法では、〔X〕が事実確認を要求する質問文であるにもかかわらず〔P〕を省略しうる。

(11)〔状況N：aとbは対立的〕

a「受かったの？〔X〕」

b「(受からなかったよ〔P〕。) だって、勉強しなかったもの。〔Q〕」

(12)〔状況N：aとbは対立的〕

a「受かったの？〔X〕」

b「(受かったよ。〔P〕) だって、勉強したもの。〔Q〕」

また、次のように、「だって」の前後の〔P〕と〔Q〕が省略される発話は、〔発話状況〕は、aとbとが対立的である場合しかない。つまり、(13)では、旧用法の意味しか生じないのである。

(13) a「勉強しなさい。」

b「だって。」

(11)(12)(13)の例からすると、旧用法においての方が省略されうる範囲は広いようである。つまりは、「だって」が文脈なしに与えられた場合、〈反発〉の意味付与が先に来るということで、こちらの方がいまだ「強い」あるいは「基本的用法」であることを示すものと言えるだろう。

なお、さらに新用法について描写しよう。次のような用法になると、言えるという人は少なくなるが、おかしくはないという個人もいる。

(14)〔状況N：aとbは親和的〕

a「おそうじしなさい。」

? b「だって、きれいにしなけりゃいけないものね。」

復元すると、次のようになる。

(15)〔状況N：aとbは親和的〕

a「おそうじしなさい。〔X〕」

? b 「(分かった。[P]) だって, きれいにしなけりゃいけないものね。[Q]」

この場合, 以下のように独話型にすると問題はない。

(16) a 「おそうじしなさい。」

b 「分かった, いいよ。だって, きれいにしなけりゃいけないものね。」

もし, 新用法が完全に熟したものになっていれば, 「親和的な発話状況である」というお互いの認知に従い, [X] の発話のタイプがどのようなものであれ, [P] では同調・共感的受話が選択され, [Q] は相手の立場にたった理由説明が生成されるということになるはずである。しかし, まだ実際はそこまで熟した用法とはなっていないようである。

次の(17)のような, [X] が《報告》の談話では, b は諾否のように態度を特にはっきりと決まなくてよい。また, 非言語的な情報で共感的態度は十分に伝わる。そこで, [P] は言語的には必ずしも必要とされないために省略に従い, 新用法を展開することができるのである。

(17) [状況N: a と b は親和的]

a 「明日スキーに行くんだ。[X]」

b 「(そう。よかったね。[P]) だって, ひきびさのお休みだもんね。[Q]」

5. 2 気づかれにくい方言

メイナード (1993: 187) に以下のような用法があげられている。

(18) a 1 「少し休暇をとろうかなあ。」

b 1 「だってずっととってないんでしょ？」

a 2 「うん。」

b 2 「それならとったら？」

この用例は新用法の使用者にとっては先に見た新用法とまったく変わりなく映るという。ところが, 旧用法しか持たない中年層の論者にとっては, (18) は, ここで見てきた新用法とは少しく違ったものとして映り, 共感というほどの親密感が感じられず, むしろ, 相手の立場には立つが突き放したようなニュアンスを感じるのである。(18) は [Q] で「だってずっととってないんでしょ？」という確認を相手に求めている。[Q] で確認を相手に求めている点で, (18) では b は a の事情を知りつくしているわけではない, というような感じを受け取り, 発話状況 N を, より根源的な「a と b は対立的」という旧用法の談話ルールで読み込むからだろうと推測される。興味深いことにメイナードもこの用法を「抗弁・自己正当化」というように解釈するのであるが, 本論の記述で読み直せば「旧用法」として解釈しているからではないかと推察されるのである。形式は同じであるが, 意味がずれるという「気づかれにくい方言 (世代方言)」の変化が今進行中であると捉えられる。(注5)

6. 出話と受話について

以上, ここまで出話と受話を定義なしに用いてきたが, 「だって」の性格とも絡むので簡単に術語の説明を加えておく。

発話は, 出話と受話からなると考える。会話では出話者と受話者が対面し, 交互にやりと

りが行われる。本論の「だって」は、この会話での用法に焦点をあてたものである。「受話」という術語は沖（1994）が用いた。「出話」ははじめ「発話」と呼んでいたが、出話・受話の総称としての用法もあるためまぎらわしく思い、造語した。これは市岡香代氏の提案を借りた。

講演や文章は聞き手が黙っていたり読み手が不特定多数であったりする。産出された談話は受容される言語行動があるとき初めて「言葉」になると考えると、いわゆる講演や文章も独話ではないという立場もありうる。しかし、発話者の交替が見られる会話は「その場性」とでもいう性格を持つことから、独話と対話は区別して考えたい。本論でとりあげた「だって」は、会話の受話の冒頭に出て来る「だって」に焦点をあてたものである。

7. おわりに

以上述べてきたことを簡単にまとめる。

対話型接続詞「だって」に、新用法が認められる。旧用法が相手への反発を基調にした談話（文連接）であるのに対して、新用法では同調・共感的な気配り談話とでもいうものが成立している。新用法と旧用法では談話全体の意味が異なっているといえる。

記述の枠組みとしては、沖（1996）で述べた文連接の形式及び文法的語義の記述は重要であるものの、それに加えて談話レベル全体の変化を記述する枠組みとして〔発話状況〕のレベルが必要であることが明らかになった。また、モダリティな意味については、〔X〕と〔P〕の関係から生じるというよりは、〔N〕と〔X〕によって〔P〕が選択されるというように修正した。その意義は〈正当化〉である。

文連接の形式のあり方、そして〈理由説明＋正当化〉という語義、また会話であることによる相手と自分との関係に関する非言語的情報の読み込みという3点の骨組みの部分は新・旧用法ともに変化していない。新用法ではそれらに代入される値について変化をきたしたものだと考察される。

また、この変化は、形式が共通し意味がずれる「気づかれにくい方言」として捉えることができる。ただいま変化が進行中の世代方言である。

今後はその他の対話型接続詞についても、本論の記述の枠組みから見直していきたい。また、「だって」における世代差の現象について、地理的分布と意味的な変異の有無についても調査したい。

【注】

注1 はやく宮地（1983）が、「だから」「しかし」などを例に、接続詞による二文連接は実は三文四文の連接である旨述べている。沖（1996）を成した後知ったためその論を参照しえなかったが、考え方としては共通の発想である。

注2 「だってaちゃん忙しかったでしょう」は、上昇調でも下降調でもよい。

注3 これを「しょうがないよ。謝らなくていいよ。」ととって、aの《謝罪》に対してそれを否定することによって相手の負担を取り除く発話だという解釈の可能性もあるかもしれない。し

かし、後述するように「a スキーに行くんだ」「b だってひさびさのお休みだもんね。」などの用例があることから、a の発話が必ずしも相手に負担をかけるものともいいきれない。

- 注 4 論者にとっては、新用法における〔Q〕のあり方は違和感が感じられるところである。相手が思っている理由をひきとって自分が述べることは、親しい仲でも僭越であるように感じてしまう。このような場合は、〔P〕を明示して独話型の受話にし、接続詞「だって」も使用しないようである。「ごめん。遅れちゃった。」「いいよ。今日学校あったもんね。」の如く。「だって」は、自分の立場を示す接続詞としてのモーダルな〈反発〉の色彩が濃い。

【参考文献】

- 井上 優 (1996) 「だって」についての所見, 電子メール私信
- 沖 裕子 (1994) 「方言談話にみる感謝表現の成立——発話受話行為の分析——」『日本語学』第13巻第8号 明治書院
- 沖 裕子 (1995) 「接続詞「しかし」の意味・用法」『日本語研究』第15号 東京都立大学国語学研究室
- 沖 裕子 (1996) 「対話型接続詞における省略の機構と逆接——「だって」と「なぜなら」「でも」——」中條修編『論集 言葉と教育』和泉書院
- 工藤 浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能——その記述方法を求めて——」『国立国語研究所報告71研究報告集3』秀英出版
- 田中章夫 (1984) 「接続詞の諸問題——その成立と機能」『研究資料日本文法』第4巻 明治書院
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 蓮沼昭子 (1993) 「対話における「だから」の機能」『姫路独協大学外国語学部紀要』第4号
- 蓮沼昭子 (1995) 「談話接続語「だって」について」『姫路独協大学外国語学部紀要』第8号
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- メイナード, 泉子 K. (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 宮地 裕 (1983) 「二文の順接・逆接」『日本語学』第2巻第12号 明治書院
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店

【付記】本論を成すにあたっては、信州大学人文学部現代日本語学演習に参加した学生諸兄姉との議論により得るところが多かった。特に大学院1年市岡香代氏、学部4年榎本瑞穂氏からは新用法の意味的な細部について多く教えを受け、また記述のヒントを得た。記して感謝します。また、御懇切なコメントを賜った井上優氏の御親切に対して、謝意を表します。

なおまた、本論印刷中に、第9回日本語文法談話会（1996年12月8日於神戸大学瀧川記念学術交流会館）で発表する機会を得た。席上有益な助言を賜ったことに謹んで謝意を表します。御指摘を本論に反映させることは間に合わなかったが、改めて別の機会に言及したい。